

発刊が大変遅くなりました。会員の皆様・読者の皆様に心からお詫び申し上げます。

新潟県リコーダー教育研究会 会報 R元-3号
令和2年5月17日(日) 発行

さえずり



会長 根津 江美子
(十日町市立上野小学校 校長)

明けましておめでとうございます

亀貝 隆

明けましておめでとうございます。亀貝 隆です。むかしリコ研の副理事長をやっていた者です。越路中を最後に退職し4年目となりました。現在、長岡市教育委員会の嘱託で、部活指導員（種目：吹奏楽）ということで長岡市立山本中学校に勤務しています。

山本中学校は生徒数50余名の小さな学校で、吹奏楽部といってもフルート2名、クラリネット2名、サクソ2名、バスクラリネット、コントラバスの木管8重奏と、パーカッション1名、そして私のピアノ、合計10名のアンサンブルです。時々樋熊先生にも来ていただいて指導を手伝ってもらって活動しています。ここ2年ほどラヴェルの小オーケストラ版の「マ・メール・ロワ」にチャレンジしています。8月にはコンサートも計画しているので聴きに来てください。



さて、世の中、働き方改革ということで、音楽活動も変わっていかねばなりません。学校というところは、仕事を増やすことは得意ですが、減らすことが苦手です。校長先生、教頭先生、頑張って仕事を減らしてください。あなた方にかかっています。

音楽教育に携わっている皆さん。まず、活動時間を減らしましょう。一番の癌は、コンクール、コンテストです。まず、勝とうと思えば、時間を減らすことが苦痛になります。「勝つことを目指す」をきっぱりと捨てましょう。かならず、勝っても次の上位大会で負けます。もっとやるやつは世の中に必ずいます。一生、戦って負けます。一生満足できず、不幸になります。不幸になりたい人はどうぞ勝つことを目指してください。そもそも日本人は集団で争って勝つことが好きです。学校も、保護者もみなそうです。しかし考えてみると、音楽教育の目的は個人の人格形成ですよね。個々の子供が人として育つことが目的です。

集団の勝ち負けではなく、個を育てることに集中しましょう。これは世界の流れです。「1日20分間、自分の音、自分の音楽と対話できる自立した子ども」を育てたいと思うこの頃です。



【編集から補説】

コンクールやコンテスト部門では金・銀・銅と評定されます。2年前に始めたフェスティバル部門では評定されません。コンテストは演奏に優劣が付けられます。期待して出場した場合、結果によっては落胆をしてしまいがちです。そこに、亀貝先生は気を付けましょうと教えてくださっています。初めてコンテストに出る指導者と児童・生徒は、覚悟をして出ることが必要です。つまり、期待したより結果が良くなかった場合、ショックが大きいのです。ですから、どのようなモチベーション(動機づけ)で出場するのか、予め話し合っておくことが必要かと考えます。大切なことは、賞の結果で一喜一憂せず、演奏についての自己評価を常にもって、日頃から指導・演奏することがあれば、本番の演奏も自己評価をもって受け止められるはずです。例えば、陸上選手は大会に出場する時に、大会記録やライバルの研究を予め行い、準備をして出場します。だから大体の結果は予測できます。このような準備が必要かと考えます。コンテストの良さもあります。より良い演奏を競い合うので、演奏の質の向上が図られます。また、お互いに磨き合いながら、同レベル同士の様々な学び合いがあります。結果が良くなくても学びはあるのですが…。

3号は、1月25日、冬の例会での発刊予定でしたが、遅くなりました。新年ボケと新型コロナウイルス感染騒動で自身が怠けておりました。今号は、「亀貝先生の新鮮な視点での巻頭言」、「第45回 県コンテスト金賞受賞・全国推薦結果」、「会員の近況」、「2020新潟シックストリートの今年の抱負」、「太田先生の紙上講習」です。

楽しく読んでいただけましたら幸いです。【編集】



第45回 新潟県リコーダーコンテスト結果

金賞受賞・全日本大会推薦団体

<独奏・重奏の部>

中学生

- プロ№1 紫雲寺中 シャノン作「アルトとテナーの二重奏曲集」より
- 2 真野中 中西覚作「村の休日」より
- 3 南佐渡中 ベーニッシュ作「モザイク」
- 4 紫雲寺中 ジェルヴェーズ作「戦いのパバーヌとガリアルド」

一般

- プロ№10 庭野宏樹 ヴィルジリアーノ作「リチェルカータ第5番」

小学生

プロNo12 堀之内小 ローゼンヘック作「アメリカンスタイルによる歌と踊り」より

<合奏の部>

小学生

- プロNo.1 馬場小 ケアリー作「カクテルズ」
2 貝野小 梁邦彦作「英國戀物語エマ」
3 北辰小 ベーニッシュ作「モザイク」
4 堀之内小 モリコーネ作「ニュー・シネマ・パラダイス」

中学生

- プロNo6 紫雲寺中 ヒリング作「ミッドサマー・メドウ組曲」
8 南佐渡中 斉藤恒芳作「7つのタブロー」より



会員の近況報告

研修会を終えて…

副理事長 野主真裕(広神西小学校)

新潟県リコーダー教育研究会の研修会(春・夏・秋・冬の例会)運営などに、今年からかわらせていただいています。分からないことも多くある中で、諸先輩方から教えていただきながら、何とか進めることができました。案内が遅くなったり不十分であったりした点、この場をお借りしてお詫び申し上げます。



今年度はゴールデンウィーク中の新潟クラシックストリートでの演奏を始め、いくつかの場所で演奏にかかわることができました。読譜が苦手な自分にとっては、曲を録音してそれに合わせて練習する日々が増えた1年間でした。練習やレッスンに参加するたびに「楽譜を読めるようになったらいいなあ…」と感じつつも、読めるようになる努力をしないので毎回同じようなことを感じ、現状維持でループしています。

リコーダーだけでなく他の楽器も楽しんだり合唱にも首を突っ込んだりしており、読譜の重要性を感じる機会も増えています。今更なかなか難しいのかもしれませんが、現状維持から脱却し、少しは読めるように、読みながら練習したり演奏したりできるように日々を過ごしていきたいです。

今後も、いろいろな楽器や音楽を通して、今の自分自身の姿より一段ステップアップできるようにかわり続けていきたいと感じています。

続けていること

杉本 優子

味噌作り。毎年11月に「あぐらって長岡」に3日間通って味噌作りをしています。1日目は持っていった米を蒸してもらい、さまして(麹菌は70℃以上だと生きられないので大事なのです)麹菌を混ぜる米麴づくり、2日目は米麴を混ぜる切り返し、3日目はゆでた大豆をつぶして、米麴と塩と水をよく混ぜて味噌玉を作り、樽に仕込みます。これを床下などの暗い所に置いておくと、翌年の夏過ぎにはおいしい味噌になります。米麴を混ぜたり、味噌玉を作ったりする手仕事が楽しく、できた味噌はとてもおいしいです。

チェンバロのレッスン。毎月1回、大好きなバッハの曲を1曲練習していきます。自分では取り敢えず最後までできたと思っているのですが、教えてもらうと全く違った曲になることがあり、いつも目から鱗が落ちるという状態です。テンポ、アーティキュレーション、指使い、チェンバロの弾き方、表現の仕方などを教えてもらうと、楽譜に鮮やかな色がついて見えてきて、音楽が生き生きとしてきます。

新潟クラシックストリート。毎年5月5日(頃)に新潟市で、音楽文化会館のホールや練習室、喫茶店などでクラシック音楽の愛好者が演奏を披露します。リコ研の有志も参加しています。練習は、2月からリリックホールにて、土・日・祝日の8~9回くらい行います。毎回参加メンバー全員がそろうというのは難しいのですが、集ま



った仲間で何回か吹いているうちに自然と音が合って響いてきます。リコ研のこれまでの積み重ねのすごさだなと思います。お互いに聴きながらアンサンブルし、動きをそろえていきます。私はリズムがとれなくて迷惑をかけていますが、一人で吹いていては得られない和音の響きを感じることができる大切な場になっています。次回は皆さんも参加してみませんか。

原点に帰る

元会長 森嘉雄

1 近況

退職して早13年。長岡駅裏の四郎丸の自宅から、田舎暮らしで栃尾の塩谷地区に移り住んで9年。のんびり穏やかに少しはなったか? 「世のため人のため」とOB団体の役割もいくつかしながら、生活を楽しんでいる現状。メダカの世話や竹林、しいたけなど屋敷内作業。ミニトラクター、



草刈機活躍の畑作業。半径500m以内では春秋かなりの山菜も楽しめる。私がよく口にする「笛吹かないでホラ吹いて、ピアノ弾かないでリヤカー引いて、文章書かないで背中や腹搔いて、おまけにハジをかいて」を正に地でゆく生活だ。それでも3年前までの4年間近く、上塩小学校にリコーダー指導を頼まれ出かけた。最近の3年間は、栃尾南小学校のふれあい相談員として、週1回学校に出かけている。今年度は音楽クラブも担当した。久し振りに子どもへの指導を楽しんだ。

2 リコーダーをとりまく現状認識

新潟県のリコーダーコンテストへの参加状況や夏季研修会の参加者減少から、来年度からやむなく、夏季研修会は中止という状況に、ある種の危機感を覚える。それは、リコーダーの良さ・効用・価値の認識不足からくる軽視になって良いのかということ。音楽教育におけるリコーダーの良さが分からなくなってきていることと、指導の仕方もよく分からない教師が増加しているのではないかとの認識。現場が諸々多忙になっていることにその要因を押しつけることは簡単だが、そこからの脱却を探らねばならない。

3 リコ研(全国・県)初期に求めたもの

昭和40年代後半から50年代にかけ、全国組織・県組織、そして、コンテストの実施・夏季合宿研修のスタート、充実へと進んだ。研修会は他に、中越音研や下越音研でも講座が開設され、毎年多くの参加者でにぎわっていた。それは、多くの教師がとりわけ小学校3年生を担当した教師の多くがリコーダーの「正しい導入・活用の仕方や有効な指導法」を求めて参加したのだった。ちなみに、私が当時関わり担当した、長岡市音研の研修会に、オーストリアから帰国して2年目の吉澤実先生を講師にお願いした。当時の阪之上小学校、第二音楽室は、教室一杯の参加者に達した。50名近い人数だった。3年生担任が中心だったが、他学年担任ももちろんOK。吉澤先生の知名度も今程高くない時期だったが、何よりも「リコーダーの指導法」と「リコーダーの音楽に触れる」ことを求めて多くの教師が参加したのだった。

一方、県リコでは、昭和52年11月に長岡市で全日本リコーダー教育研究大会が開かれた。今は亡き、花村大先生(旧文部省)、徳山博良先生(全日本会長)を中心に、地元新潟は、小原惇先生・皆川昌雄先生を事務局に、リコ研会員みんなで作り上げた大会であった。リコ研メンバーの年齢も、20代～30代が中心。西暦1977年だから、今の年齢から42～13を引くと当時の年齢。

求めていたもの、それは、やはり、リコーダーの果たす役割・価値である。さらに、「コンクールでの演

奏曲」ではなく、「日々の授業で使える良い曲」は無いかと探し求めていたのでもあった。

県コンテストは昭和50年が第1回。全日本コンテストは昭和54年が第1回。長岡研究大会の翌年53年度に研究大会(東京大会・上野学園にて)が開かれ、そこで、翌年に第1回 全日本コンテスト開催の件が示されたのであった。そして、新潟県リコーダー教育研究会メンバーが「探し求めさらに燃える時期」に突入してゆく。(次号に続く)

【編集から補説】

長年継続してきた夏季研修会は、昨年度で終わりとなりました。参加者の減少と、会として継続していくことの難しさがあるためです。会発足の当初から、夏季研修会は始められ、「リコーダーの良さ・効用・価値」を、参加する現場教師に発信・提供する役割を果たしてきました。森先生は更に、長岡地区で、研修会を企画され、現場教師に発信・提供されてきました。教育現場は物理的にも精神的にも忙しくなっていると思います。しかし、「教師は常に研修を」というのは変わりません。多忙感を感じつつも、教師は、子どものために指導力向上に日々務めていることと思います。しかし、そんなにできるのでしょうか。個々の教師の特性・興味・関心に応じて、指導力向上は図られていくと考えます。研究会はそれに応えるべく、これからも研修の場を発信・提供していくことが大切です。そうすることによって、教師の「リコーダー指導についての学びの姿勢をくすぐり」、子どもへの指導が的確になっていくことと信じます。これからも、リコーダーの良さ・効用・価値を提供し続ける研究会であることは変わりません。



2020新潟クラシックストリートへの参加について

今年で第10回となる、新潟クラシックストリート。第2回から樋熊が参加。合奏には第3回から。有志を募り、故小池純夫先生も一緒に合奏に取り組んで来た。徐々にアンサンブルのできあがりも向上してきているように思う。3年前までアレンジ物が多かった。昨年からルネサンス・バロック等のオリジナル作品に戻った。やはり、オリジナル作品は、その作品らしさとリコーダーの自然な響きを改めて実感することができたように思う。今年も引き続きオリジナル作品、初期バロックの曲に取り組み始めた。冬の例会で太田先生が講習して下さった曲が、国は違えど初期バロックの作品で大変参考になりました。

【演奏曲】

ヨハン・ヘルマン・シャイン 作曲 / 「音楽の饗宴」から 組曲 第10番・15番・7番
各組曲とも、パバーヌ・ガリアルド・クーラント・アルマンド・トリプラの5曲から構成されている。

※ ドイツ初期バロック

※ 原譜の五線に縦線がありません。読みにくいので、現代譜に書き換えた縦線有りを使っていますが、音価が現代譜の倍の長さのため、みんなで読譜に苦慮しています。(>_<)

【メンバー】

S 樋熊 三津男 T1 上村弥 A 亀貝隆 B1 杉本優子 T2 瀧田早苗 GB1 神田成一
T2 笹川幸絵 GB2 高橋祥子 B2 皆川昌雄 CB 前田英也

※ 神田さんはすっかりメンバーとして定着してくださっています。今年は、もうお二人から力を貸していただいています。私たちの演奏を新潟市まで足を運んで、聴きに来てくださっていた「砂時計」のお二人です。

【期日・会場】 5月5日 新潟市音楽文化会館 大ホールステージ

しかし、新型コロナウイルス感染への懸念のため中止となりました。練習中場での中止でした。現在練習も中断しています。落ち着いたら、練習を再開したいと考えています。

折角練習してきましたので、場面を変えて演奏する予定です。

【今後の演奏予定】

- ・ 8月16日(日)、14時開演、山本中学校吹奏楽部の演奏会(長岡市立劇場)にて
- ・ 9月27日(日)、長岡リコーダーフェスティバル(長岡市中央公民館)にて



リコーダー部担当者からのお悩み Q & A

リコーダー奏者 太田光子

新潟県リコーダー教育研究会の皆さま、こんにちは。
リコーダー奏者の太田光子です。

今回は、リコーダー部指導者の皆様からお寄せいただいた質問にお答えしてまいります。



Q.1 基礎練習について

①★基礎練習について教えてください。基礎練習は、全員アルトリコーダーを持たせて、部長の指揮でタンギングやスタッカート、長さや速さを合わせることをやっています。他には、パート練習・全体練習で合わせるというのが多いです。

②★部活動の時間が削られていて、1回の時間は短く、週の回数も少ない中で練習をしなければならないのが悩みです。基礎練習も厳選しないと…ということで、息や指、リズム等についての必要だと思いう基礎練習をさせています。しかし、子どもたちには、やらされている感やマンネリ化があります。ロングトーン練習の目的は何でしょうか。

→ そこで、基礎練習のプログラムを作成する場合、克服したい技術や音楽的な課題(目的)についての基礎練習プログラムをいくつか教えていただけますでしょうか。

A. 全員で同時にタンギングすると、本人が自分の音を聴くことはできないのではないのでしょうか？自分の音をまず聴かなくては上達できません。そして何がどのくらいできるのか一人一人違うはずなので、運動部のようにみんな一緒にがむしゃらにトレーニングする必要を私は感じません。目的の分からない「基礎練習」はやらなくてもいいのではないのでしょうか。

リコーダーのテクニックとしては、息、舌、指それぞれ一人一人がコントロール出来ていることが大切です。中でも息のコントロールはそのまま音色に直結しますので最も重要です。どんなに指や舌が動いても、聞くに堪えない音を出されては全て台無しになってしまいますからね。

ただロングトーンの練習をする代わりに、一つの音を変わりばんこに吹き、皆で音を聴き合う時間をつくってみたいかがでしょうか？

例えば、一人がアルトリコーダーで真ん中のソの音一音のみを吹き、それをみんなでじっくり聴く。そして全員の耳で以下の項目を確認してみましょう。

- ・音がきれいかな？
- ・変な雑音はしないかな？
- ・キツイ音になっていないかな？
- ・弱々しい音になっていないかな？
- ・聴いていて心地よい音かな？

タンギングに関しても同様の練習ができますね。音が割れるほど強く発音してしまう人、タンギングする度に息も止まってしまう人等々、問題は個々違います。それをきちんとまず耳で確認し、自分がどういう状態で吹いているのか知ることから始めてみてください。

指の練習に関しては、曲の中に出てくるパッセージで練習することをお勧めします。なぜなら問題が表面化するの、曲の中で難しいパッセージが出てきた時だからです。そして難しいパッセージをやみくもに何度も繰り返し練習するのではなく、そのできないパッセージの中のどの音からどの音に行く時に上手くいかないのかを、よく聴いてまず見極めてください。前号(令和元年度2号)の「細かい音をきれいに並べるには」での方法が役に立つと思います。

リコーダーのテクニックではない問題点、リズムや譜読みに関しては、これはできるかできないか、ハッキリと二分しているのではないのでしょうか？ですからこちらも同様にみんな一緒に練習するわけにはいかないところだと思います。例えば、すでにできる生徒ができない生徒に教えてあげる環境をつくってみたいかがでしょうか？

なお、これらに関しては問題がリコーダーではないので、リコーダーを持たずに歌わせてみる、手で拍を

打ちながらリズムの取れない箇所を口で言うのも手です（ただし恥ずかしがって歌わないことも多いので、なかなか難しいかもしれませんが）。

Q.2 合奏曲の途中でテンポを変えたい（アツチェレランドやリタルダンドしたい）場合、どのように指導・指揮したらよいでしょうか。

合奏曲で、（特に1フレーズの中で）テンポを変化させたいのですが合わなかったり、テンポを変化させようとしたりしてもうまくいきません。譜読みの段階や個人で練習する時に、テンポをきちんと刻むためにメトロノームを使いますが、それが影響しているのでしょうか。すぐに一定のテンポ(リズム)に落ち着いてしまいます。練習不足だったり、指揮を良く見ていなかったりするとも言えます。テンポを変えたい場合、どのようにしたらうまくできますか。また、どのような基本練習のプログラムがありますか。また、指導(指揮)のコツがありますか。

A.まず、アツチェレランドやリタルダンドをしたい時、ただ速くする、遅くする、というのではなく、どうしてそうしたいのかな？それをすることでどういう効果がほしいのかな？という音楽的なアイデアを全員で共有できていることが重要です。

また、リタルダンドする時には、「2拍目のこの音から遅くする」等、リタルダンドを開始する鍵となる音があるはず。その時に指揮者はその音を持つパートにはっきりとした指示を出し、かつ全員がその音および音楽全体を聴いている状態にするのがコツです。

漠然と指揮に従わせるのではなく、「自分はこの音を聴いた後に、こういうタイミングで次の音を吹く」と、各々が具体的に理解し、能動的に音楽できていることが重要です。

なお、指揮を見ていないのであれば、そのテンポが変わる小節だけは暗譜しておくのも手でしょう。

Q.3 「音が固い、音が柔らかいについての定義を知りたい」そして、「固い・柔らかい音をどうすれば、出す(出させる)ことができるでしょうか。

「音が固い」とか「音が柔らかい」と言いますが、実際に指導しようとする時、そもそも何をもって音が固い（柔らかい）と言うのかよく分かりません。タンギングであれば、舌をつける感じで違いがあると思いますが、音については息遣いのことでしょうか。また、「固い音」から「柔らかい音」に変化させたい時はどうすればできるのか、指導のポイントを教えてください。

A.「音の定義」・・・、難しいですね。音が固い、柔らかいという感じ方は、千差万別でしょう。

一つの音をいつも吹いているように吹いてみて、その後でちょっと強く吹いてみたり、ちょっと弱く吹いてみたりしてみてください。ご自身の耳で自分の音を聴いた時、音色が変化しませんか？

Q.1でお答えした、ひとつの音にじっくり向き合う時間をつくることで、違いが聴こえてくるのではと思います。また、「さえずり」H28-3号の「リコーダーの息づかい 第4回～『リコーダーが鳴っている音』とは～」も参考にしてみてください。

Q.4 高音を発音する時の息づかいについて

「バラの香り」という曲の第1楽章(やさしい曲想)の冒頭、ソプラノが上第一線のラを、音が割れる状態で発音してしまいました。高音を美しく出す時の息づかいについて良い指導法を教えてください。

A.曲がスタートする時の一発目の音、ソプラノパートさんは、「入りの合図をみんなに出さなくては」「高音を決めなくては」と、かなりのプレッシャーがかかっていることでしょうね。

まず、音が割れる原因はこの2点です。

- ・タンギングが強すぎる
- ・息が強すぎる

さらに難しいのは、合図を出すためのブレスや動作と同時にこれらをコントロールしなければならない点です。曲の冒頭で緊張することも考慮し、意識して慣れておく必要があります。以下に注意して練習してみてください。

- ・タンギングは“tu”だと音が割れがちなので、“du”と少し柔らかめにしてみる。
- ・練習時、ラの音が上手く出ている時の息の量を意識して覚えておく。
- ・吹き始める前に、裏側の親指の開け具合を確認しておく。
- ・合図とブレス、そして最初の音を出すという一連の動作を取り出して、練習をする。

A.① 音程が高い楽器は頭部管を少し抜き、一番音程の低い楽器に合わせるのが基本です。楽器の個体差で、例えば「この楽器のこの音だけ高い」ということも考えられます。その場合は、その楽器を吹いている本人がその音のみ息を弱める、指使いを変える等、対処する必要があります。

また音程合わせをする時に、どちらが高くてどちらが低いか同時に吹くと分からない時も多いでしょう。その場合は同時に吹かず、短めの音で交互に何度か吹いて聴き比べると、判断しやすいです。

チューニングしたのに曲を吹く時に音程が合わない場合、チューニングした時と同じ息を使っているか確認してみてください。

よく見られるのは、チューニング時に音を合わせようとして弱く、もしくは強く吹いてしまうことです。それで音程が合ったとしても、曲中ずっとその息で吹かなくなるとはいけなくなってしまいますね。チューニング時に「曲で使う息」で吹いているか要チェックです。

A.② 音の立ち上がりはどのように不ぞろいですか？

よく見られるのは、合図を出した本人が一番早く音を出してしまうことです。

指揮者が指揮をする時のことを考えてみましょう。タクトを上げてから下げて一番下に着いた時が音のスタートになります。それと同様に、アンサンブルのメンバーの1人、例えばソプラノ奏者が指揮をする場合、リコーダーを少し上げ、その後、リコーダーの先が一番下に着いた時が音のスタートである、と決めておきましょう。そして合図を見る人は、合図を出す人に従おうとすると遅れがちになるので、合図を出す人と一緒にブレスをするつもりでいることが大切です。

A.③ 一人一人の音の長さが不ぞろいになるということでしょうか？

まずは音の長さを決めて、音を切る瞬間を揃えてみてください。

そして、同じパートを複数の人で演奏している場合には、まるで一人で演奏しているかのように揃うまで合わせましょう。

実際に子供たちの指導に携わっている先生方から、実践の場で問題になっている事柄についていくつかの質問をいただき、とてもうれしいです。

今後とも先生方のお役に少しでも立つことができればと思っております。
また次回お会いしましょう！



<<編集後記>>

3号は、亀貝先生の巻頭言を始め、新鮮な執筆内容がたくさんありました。原稿執筆してくださいました、亀貝先生・根津会長(県コン結果)・野主先生・杉本先生・森先生、太田先生、感謝申し上げます。

太田先生からは、部活指導者の悩みについて具体的に回答いただきました。ズバリ回答くださり、悩みを寄せてくださった先生方からは、雲晴れる思いになっていただけると良いですね。太田先生ありがとうございました。そして、悩みを寄せてくださいました先生方に感謝申し上げます。次回も続けられたらと思います。他校の指導者の方にも悩みを伺いたいと思います。また、積極的に寄せていただけると嬉しいです。

我が県リコには優秀な指導者が多数います。現役・OB 共に。太田先生に限らず、会員の方からも、悩みに回答いただけるようにしていけたらと思います。現場に指導者を派遣することも可能かと思えます。

3月末開催予定でした、全日本リコーダーコンテストは、新型コロナウイルス感染の心配により、中止となりました。出場に向けて準備されていた皆様は、今後に向けた新たな思いでリコーダー熱を持ち続けていただきたいと思えます。

長い間、広報を担当してきました樋熊は、今号を最後に担当を退きます。これからも、「さえずり」に声を寄せてくださいますよう、お願い申し上げます。

◆ 投稿・問い合わせ等は、こちらにお願いします。(*^。^*)

mitu3tu@gmail.com / 080-3322-1776 です。編集 [樋熊]

/ホームページ：児玉禎明 /さえずり編集：樋熊 三津男

